

メリッド・ウォルデ・アルゲイ博士

石原 美奈子

先日、エチオピアのアジス・アベバ大学社会科学部歴史学科の助教授メリッド・ウォルデ・アルゲイ (Merid Wolde Aregay) 先生が国際交流基金の招へいで来日された。4月半ばから2ヶ月と短い滞在ではあったが、京都や長崎まで足を運ばれ、忙しい日程を精力的にこなされた。今回来日された主な目的は、16から17世紀までの日本におけるイエズス会の活動に関する文献調査であった。調査を目的として来日されるエチオピア人は数少ない。言葉の障壁のせいもあるが、日本に対し多方面から関心が寄せられつつ、日本社会を研究対象として理解しようといった余裕が現在のエチオピアの歴史学にはまだみられないからかもしれない。

メリッド先生は、ハイレ=セラシエ1世大学(のちのアジス・アベバ大学)の歴史学科を卒業された後、ポルトガルへ政府の派遣留学生として渡航された。ポルトガルでは、16世紀以降エチオピアにおいて広範な布教活動を展開すると共に、当時のエチオピア社会に関するすぐれた記録を残しているイエズス会修道士たちの著した膨大な文献に関する調査を展開された。その後、ロンドン大学へ留学され、東洋アフリカ研究所で博士論文「エチオピア南部とキリスト教王国：1508～1708年：

ガラ族の移動とその影響」を提出された。そして帰国後はアジス・アベバ大学社会科学部歴史学科の学科長とエチオピア研究所の評議員を兼任されて今日に至っている。

メリッド先生のこれまでの研究が欧米でも高く評価されている理由の一つは、ヨーロッパの諸言語に加え、エチオピアの古典語ゲーズをも駆使することができる点を生かして、16から18世紀までのエチオピア北部の諸王国の形成と発展について多面的な分析を行なっていることにある。それまでの歴史学ではほとんど無視されていたエチオピア南部のガラ(オロモ)族やムスリム諸王国との交易関係や戦争、さらにポルトガル等ヨーロッパ諸国やアラブ諸国との外交、交易関係が北部王国の形成と発展にもたらした影響に着目している。このような広い視点を備えもっていたがゆえに、日本へのイエズス会の派遣とそれを受入れ、あるいは排除した日本社会を比較の対象として視野に入れることができたのである。

メリッド先生は、イエズス会修道士の日本における活動だけでなく、当時の日本の政治社会的背景にも関心をもたれた。とくに、日本の寺社と天皇家の関係、エチオピアの教会と王室との関係比較、両国におけるイエズス会との対応の仕方の比



メリッド・ウォルデ・アルゲイ博士

較など興味深い問題に注目しておられた。

メリッド先生は、多忙な日程の合い間に、日本のアフリカ研究者や中東研究者とも交流を深め、研究者の人数の多さとその層の厚さに驚かされていた。だが、その驚きはある意味で日本の研究者が国際的な議論の場に参加しきれていないことをもの語っている。メリッド先生は、その意味でも今回設立された日本ナイル・エチオピア学会に大きな期待を寄せている。日本人研究者同士の対話や議論を進め、さらにその成果を英文の雑誌等の刊行物で紹介する。海外の研究者からの評価や批判を受けることは、日本の研究水準の向上にもつながり、相互の議論や理解を深めるきっかけにもなる。

たとえば、エチオピア南西部において展開されている福井勝義氏（国立民族学博物館助教授）を中心とする文部省科学研究費による人類学調査隊の業績は、エチオピア研究の中で高く評価されているものの、その大部分が日本語で著されている

ため、海外の研究者にとってアクセスが困難となっている。エチオピアの場合、複数の民族をいかに統治するかが昨今の緊急の政治的課題となっている。人類学者の役割や社会的貢献といった側面が近年ますます曖昧になってきているのとは裏腹に、エチオピアにおいては人類学者の実績はむしろ見直されているといっても過言ではない。本学会に対するメリッド先生の期待には、アカデミックな側面以外にも、こうした国内の政治的事情が背景にある。

6月26日、メリッド先生アジス・アベバに向けて成田を発たれた。エチオピア人にしては珍しく、バルバレ（とうがらし粉）なしの淡泊な日本食を心から好まれ、日本の風土にすっかりなじんだかに見えても、やはり治安の悪化がいっこうに改善されない首都アジス・アベバに残してきた御家族のことが御心配だったようで、帰国便に乗り込む先生は安堵と嬉しさを隠しきれない様子だった。

先生と御家族の平安をお祈り申しあげるとともに、今回のメリッド先生の来日が、今後両国の社会科学分野における対話と交流を促すきっかけとなることを期待したい。

〔いしはら みなこ 東京大学大学院〕